

「私の中のアメリカと、アメリカの中の私」

岩見沢校 芸術課程 芸術文化コース
2年・藤平 佳奈

自由の国。なんでもサイズがデカイ国。スクリーンの向こうの国。日本から出たことの無かった私が抱いていたアメリカの印象は、こういったものでした。

そしてその通り、空港の職員は仕事に大声で爆笑しているし、人も車もやたらと大きいし、ダウンタウンの街並みは映画のセットにしか見えませんでした。人が溢れるそこでは、大道芸人やミュージシャンがストリートパフォーマンスをしていて、信号待ちをしているとホームレスに小銭を求められます。服屋の店員さんは皆フレンドリーに話しかけてくれますが、何と言っているのかよく分からなくて悔しかったです。ときどきの外れな返事をして笑われもしましたが、旅の恥はかき捨て、とはよく言ったものです。



図上：シアトルのランドマーク、スペースニードルから見下ろした街並み



図右：像に扮したストリートパフォーマー

私は、2013年8月24日から9月13日の間、ワシントン州シアトルにあるワシントン大学が主催する、**Short Term English Program**（通称STEP）に参加しました（ちなみに多くの方が勘違いしていますが、アメリカの首都ワシントンD.C.とワシントン州は全くの別物であり、場所も正反対です）。参加者のほとんどは日本人ですが、サウジアラビア人や中国系も少しいました。総勢130人近くが10ほどのクラスに分けられて、一緒に英語を学びます。聴くのも、読むのも、話すのも、全て英語。そしてホームステイ先に帰れば今日一日の出来事をホストマザーに英語で報告。本当に英語まみれの3週間でした。

プログラムの最後には、いくつかのジャンルごとにグループ分けをして、英語でプレゼンテーションをしました。私は、アメリカのファッションについて発表しました。その中の必須項目に、10人のアメリカ人にインタビューをしてアンケートを取るというものがありました。日本でも知らない人に話しかける事なんて滅多にしないので不安だったのですが、多くの人が親切に答えてくれて、アメリカ人の優しさが身にしみました。

何度もめげそうになりましたが、日本ではテストの科目でしかない英語を、生活するための言葉として使用することはとても新鮮な感覚でした。返ってくるのは赤ペンで書かれたマルやバツではなく人の活きた反応なので、自分の英語が伝わればとても嬉しかったし、相手のいう事を聞き取れなかった時は物凄くもどかしく感じました。

私のクラス担任は、しばしば私たちを外に連れ出す人で、授業の一環の時もありましたが、全く授業をしないで外に出かけて終わった日もありました。天気の良い日にはクラスの皆で近くの湖に遊びに行ってお茶屋に乗り、他のクラスと対抗で野球をした時もありました。フィールドワークと称して大学近くのカフェに行かせてくれたこともあります。彼女はシアトルの流行りものやスラング、地元で根付いた文化を沢山教えてくれました。

お昼で授業は終わり、午後からは自由時間でした。週に何回かは自由参加のシアトル散策アクティビティーに連れて行ってもらえて、ある日はダウンタウン、ある日はショッピングモール、ある日は島に行きました。アクティビティーの無い日や土日には、自分たちだけで買い物や観光に出かけ、ホームステイ先を仲介してくれた業者の計らいで、マリナーズの試合も観戦しました。



図左：シアトル・マリナーズの本拠地セーフコ・フィールド 図右：ダウンタウンでの一コマ

思いつき日本人の私が街中を歩いてもさほど浮くことがない程、シアトルは様々な人種の人たちで溢れています。白人や黒人の人だけではなく、中国人や韓国人と思われるアジア系の人もいれば、頭や顔を布で覆った中東系の女性も様々な場所で見かけました。皆ちゃんと英語を話せていて、この場所で生まれ育ったかのようなようでした。コメディドラマさながらにフランクに話しかけてくれた黒人のお兄さんもいれば、ブロンド美人な白人のホストシスターは、口数が少なくシャイな性格で親近感を感じました。

本当に色々な人がいて、日本人の自分が持つものさしでは、アメリカという国はとても測りきれないと感じました。そのスケールの大きさは、自分で実際に行ってみて感じるほかに方法は無いと思います。そしてその時にはぜひ、英語を「聴く」力を高めてから行って下さい。書いたり読んだりするのは今までの知識で十分カバー出来るし、喋ることは最初の方こそ大変だけど徐々に慣れます。しかし、聴く力は一朝一夕では上達しないので、

youtube で洋楽や英語のスピーチ等を聞いて、リスニング能力を高めることお勧めします。